

芥川龍之

芥川龍之介

新潮社版

芥川龍之介

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／光邦印刷株式会社 製本所／大口製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

羅生門	七
鼻	一五
芋粥	二三
手巾	四一
煙草と惡魔	五一
偷盜	五九
或日の大石内藏助	二七
戲作三昧	一元
蜘蛛の糸	一五

藪	山	秋	杜	南	秋	舞	蜜	枯	奉	地
の		山	子	京		踏		野	教	獄
中	嶋	図	春	の		会	柑	抄	人	変
				基					の	
				督					死	

二七	二五	二五	二五	二五	二五	二七	二三	二〇	一九	一五
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

神神の微笑

二九

トロツコ

三二

六の宮の姫君

三七

お富の貞操

三五

一塊の土

三七

大導寺信輔の半生

三九

玄鶴山房

四五

蜃気楼

六一

河童

六九

歯車

四七

或阿呆の一生

解 年 注
説 譜 解

中
村
真
一
郎

四九

四九

五七

五五

芥川龍之介

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男の外に誰もいない。唯、所丹塗の剝げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の

料に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいに、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代り又鴉が何処からか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴉尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——尤も今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。唯、所、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来

た、大きな面砲を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようとか云う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波に外ならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下からふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、

聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した薨の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでゐる違はない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為に、当然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云う事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の

寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にい

る者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来る丈、平にしながら、頸を出来る丈、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、賞、生きていた人間だと云う事実さえ疑われる程、土を捏ねて造った人形のように、口を開

いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上のところが
つていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部
分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている
部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く黙って
いた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思わず、鼻
を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻
を掩う事を忘れていた。或る強い感情が、殆ど悉こ
の男の嗅覚を奪ってしまったからである。

下人の眼は、その時、はじめて其死骸の中に蹲つて
いる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦
せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆
は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死
骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の
長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされ
て、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者
の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたの
である。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿し

て、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をか
けると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、そ
の長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従っ
て抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の
心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、
それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少
しずつ動いて来た。——いや、この老婆に対すると云
つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる悪に
対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。

この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が
考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題
を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もな
く、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪
を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢
よく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くか
わからなかった。従って、合理的には、それを善悪の
何れに片づけてよいかわからなかった。しかし下人にと

つては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それ丈で既に許す可らざる悪であった。勿論、下人は、さっき迄自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云う迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで髻にでも弾かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかつてゐる。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになる程、見開いて、啞のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、何時の間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、唯、或仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔げてこう云った。

「己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。唯、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話さすえすればいいのだ」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆ど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしうと思ふたのじゃ」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持ったなり、慕のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、その位の事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。」

現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買っていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今又、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いている。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰を気にしながら、聞いているのである。しかし、之を聞いている中に、下人の心には、或勇氣が生まれて

来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、又さっきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、殆ど、考える事さえ出来ない程、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか」

老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面頬から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己が引剝をしようと思ひまいな。己もそうしなれば、餓死をする体なのだ」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわき

にかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

(大正四年九月)

